

# イギリスの現代演劇に見るイギリスの人種問題の変遷

竹 中 彌 生

## はじめに

「イギリスの人種問題」などという大きな表題を掲げているが、これは、一冊の本で書こうとしても書ききれないほどの大きな問題で、本論では、三つの現代演劇を時代順に取り上げ、それらがそれぞれの時代に応じて人種問題をどのように取り上げているかを示し、人種問題がイギリスという国でどのように推移して来たか、そのほんの一端をのぞいて見る。

本論では John Galsworthy (ジョン・ゴールズワージー, 1867-1933) の *Loyalties* (『忠誠心』 1922), Arnold Wesker (アーノルド・ウェスカー, 1932-) の *The Kitchen* (『調理場』 1959) そして Kwame Kwei-Armah OBE (クワメ・クウェーアルマー, 1967-) の *Elmina's Kitchen* (『エルミナのキッチン』 2003) を取り上げる。この三つの作品及びその周辺の作品から、それぞれの時代に、イギリスでの人種問題の関心がどこにあり、どのような問題があったか、そしてそれがどのように変わっていったかを見てゆく。

各作品に入る前に、二つのことを述べておく必要がある。第一に、ヨーロッパにおける演劇というものの重要性である。演劇というものは、その性質上、作品の生まれた社会的背景を大変よく映し出す。芸術作品はいずれにしても、その生まれてきた社会の産物であり、その限りにおいてはその社会を映し出すものであるが、特に演劇は、戯曲として書かれても、それが上演されなければ作品としては完成したとは言えない。この、演劇というものの性質上、どうしても作品はその社会的背景を強く反映するという特質がある。上演されるためには、演じようという人、そして観客が必要であり、さらに上演の場が必要である。その他にも、音楽、衣装、舞台装置、照明、その他舞台を可能にするために多くの必要な要素がある。これら全てを満たすためにはかなり大きな経済的負担もあり、また人員の動員も必要になる。つまり、多くの人々の賛同と理解を得て初めて成立するのである。したがって多くの芸術の形態の中でも、演劇は社会をよく反映せざるを得ないのである。劇作家が

描き出す世界には、その作家が生きた社会が色濃く反映されているのである。

更に、演劇作品は血の通った人間が舞台の上で実際に動き、話し、笑い、泣き、感情を表し、実際にその時代の、その社会に生きた人がどのように行動したかを表現する。したがって、単なる歴史的事実だけでなく、その時代の人間社会がどのような社会であったかを知るためには、演劇ほど優れた媒体はないと言える。

ヨーロッパでは、文豪と呼ばれる人は、先ず、詩人であり、劇作家であることが重要で、たとえば、日本で人気のある *Les Misérables* (『レ・ミゼラブル』) の作者、文豪 Victor Hugo (ヴィクトル・ユーゴー、1802-1885) は日本では小説家として見られているが、本国のフランスでは何よりも第一に詩人、そして劇作家として捉えられている。『レ・ミゼラブル』は新聞の連載小説で、ある意味、お金稼ぎのための三文小説であったという見方もある。したがって、ユーゴーには、たとえば、彼の劇 *Hernani* (『エルナニ』) がどのように批評家に評価されるかが、大変重要な問題であったのである。文豪 Honoré de Balzac (バルザック、1799-1850) は、フランスを代表する小説家であるが、劇も少し書いていてそのうちの一つ *Le Faiseur* (『いかさま師』) という劇について、生前「他の作品は全部忘れ去られても、私はこの作品一つの作者として人々の記憶に残れば本望である」と言ったと伝えられている。

演劇は政治的に使われることも多く、Bertolt Brecht (ベルトールト・ブレヒト、1898-1956) がその作品によって世界を変えようとしていたことは有名であるし、日本でも有名な長編小説 *Tom Jones* (『トム・ジョーンズ』) の著者 Henry Fielding (ヘンリー・フィールディング、1707-54) も最初は劇作家として社会派、政治的作品を書いていたが、観客を扇動し、社会的不安を与えるとして作品の上演許可が得られなくなったために小説に転じた作家であった。イギリスにおいて1968年まで検閲があったのも実はこの演劇の政治性によるものであった。

このような演劇の性質、また多くの優れた作家が演劇を志したことからも演劇作品は、社会を研究するのに大変優れた媒体であると言えるのである。したがってイギリスの人種問題についても、各時代の演劇にこの問題がどのように描かれているかを見ることにより、よく理解することができるはずである。

第二に、イギリスの社会と言えば、先ずそれが階級社会であるということである。オックスフォード大学の文化人類学者、Kate Fox (ケイト・フォックス) はその著書 *Watching the English* (『イギリス人観察』2004) の中で、この本を書くにあたって階級という章を設けることはしていないと述べ、その理由として、次のように

説明している。イギリス人の生活のどこの部分を見ても、階級抜きに考えることはできない。何を論じても、階級というものが入り来ざるを得ない。あまりにもあらゆる場面で階級の影響があるので、階級についての独立した章を設けることは、イギリス人について論ずるときは不適當なのである<sup>1</sup>というのである。

イギリス社会にとって階級問題とはこれほど支配的な要素なのである。したがって、人種問題を扱うときも、そういう階級社会の問題なのだということを理解しておく必要がある。

## I. ユダヤ人問題：ジョン・ゴールズワージー作 *Loyalties* を中心に見る

ジョン・ゴールズワージーの *Loyalties*<sup>2</sup>は題名が示すように、正義感と公平意識の強かった作者が、忠実であるということはどういうことか、ないし忠誠心とは何なのかというということを考察している作品であり、例えば友人に対する忠誠心のために正義が曲げられることはないか、あるいは身分のために得るべき忠誠心を得られないことがないか等を問うている作品であり、特にその身分には人種も入ることがユダヤ人の青年を通して描かれる。

ゴールズワージーはノーベル賞受賞作家で、ペンクラブの創立者であり、日本でもよく知られているが、おそらく普通は、映画にもなり、テレビ・ドラマの連続ものとしても放映された *Forsyte Saga* (『フォーサイト物語』, 1906～1921) の原作者として一番よく知られているのではないだろうか。他にも多くの小説を書いており、今では小説家としての方が有名であるが、生前は劇作家として活躍した。

既に述べたように劇というものが重要なヨーロッパ社会において、ゴールズワージーも戯曲の制作には、大変力を注いだことは間違いない。また、常に、社会正義や法の公平性などを訴えようとしたゴールズワージーが劇という社会性の強い芸術形態で作品を発表したのは当然のことであらう。

ゴールズワージーは貴族ではなかったが、裕福な上流階級に生まれ、パブリック・スクール、ハーロー (Harrow) からオックスフォード大学に進み、法廷弁護士になった人物である。しかし、この仕事は自分には向かないと見え、やがて、作家としての活動を始めた。これは、彼が論理的に詰めるだけの法廷よりも、血の通った人間を通じて社会正義を訴える方がより効果的であると考えたことを表していると言える。彼自身は、上流階級の出身で、正しい道德観と正義観を持ち、道德や正義が、相手、特に人の出身階級により決められてしまうような風潮に対して、強い嫌

悪感を持っていたこと、そして、ヴィクトリア朝時代の、上・中流階級の価値観に対して批判的であったことが *Loyalties* を含む彼の作品にはよく表れている。

社会正義を求めようとする点において、ゴールズワージーは同時代の **George Bernard Shaw**, (ジョージ・バーナード・ショー, 1856-1950) と通じるものがある。ショーと同じように、彼も作品を通じて、世の中の不正を暴き、公平な世の中を作りたいと思っていたことが、彼の作品にはっきりと表れている。

*Loyalties* はユダヤ人の青年がユダヤ人であるが故に不当に扱われる話であるが、作品に入る前に、イギリスにおけるユダヤ人の歴史を振り返っておく必要がある。

イギリスにおけるユダヤ人の歴史はローマ時代にまで遡る。ブリテン島にやってきたローマ人と一緒にユダヤ人もやってきたと思われるが、公式の文書では、740年にヨークの枢機卿 **Egbert** (エグバート) によって出され、更に833年にクロイランドのカトリック僧によって出された、キリスト教信者に対するユダヤ人の宗教行事に参加しないようにという命令から、すでにこの頃かなりの人数のユダヤ人がイギリスに住んでいたと推測される<sup>3</sup>。ノルマンディー公、ウィリアム1世 (**William I**) が1066年イギリスに侵攻し、征服した時、ウィリアムは一族とともにユダヤ人もいっしょに連れてきたと言われている。<sup>4</sup>イギリスにおけるユダヤ人居住に関する最初の記録は 1070年のものであるが、ユダヤ人はローマ帝国による占領時代からイギリスに住んでいたと考えられている。その後エドワード1世 (**Edward I**) による **Edict of Expulsion** (ユダヤ人追放令) が出る1290年までユダヤ人は普通にイギリスに住んでいたようである。<sup>5</sup>

清教徒革命のリーダー、護国卿オリヴァー・クロムウェル (**Oliver Cromwell**) が、ユダヤ人がイギリスに戻ることを公式に許したということではなかったが、清教徒革命後の1656年頃には、少数のユダヤ人がイギリスに戻って来ていたようで、この頃ロンドンには少数のスファラディ系のユダヤ人が住んでいたという記録が残されている。<sup>6</sup>それ以前からもヨーロッパの中では比較的ユダヤ人に対して寛大であったイギリスにいつの間にか移り住んでいたと考えられている。その後1753年には **The Jewish Naturalisation Act** (ユダヤ人帰化令) が出され、イギリスにおけるユダヤ人の存在が合法化された。

1858年には **Jewish Disabilities Act** (ユダヤ人救済法) が通過し、ユダヤ人でも国会議員になれるようになる。最初の議員は **Lionel de Rothschild** (ライオネル・ロスチャイルド, 1808-1879) であった。しかし、ここに至るまでライオネルの道は決して平坦なものではなかった。彼は既に1847年にロンドン選挙区から選出され

た下院議員の4人のうちの一人であったが、議員として認められるために必要なキリスト教徒としての宣誓を拒否したために、国会議員になることが許されなかった。1848年、John Russel (ジョン・ラッセル) 首相のときにユダヤ人救済法が下院を通過するが、上院(貴族院)がこれを拒否したために、実質上はユダヤ人に対する差別は残ったままであった。ライオネルは1850年に再度選挙に当選するが "upon the true faith of a Christian" (キリスト教徒としての真実の信仰に従い) という宣誓の言葉を言わなかったために、議員として認められなかった。1858年7月26日、ついにユダヤ人救済法が通過し、ライオネルは "so help me, Jehovah" (ヤーヴェの助けがあらんことを) という言葉で宣誓して議員の仲間入りをした。しかし、このライオネルも1868年、House of Lords (貴族院) の議員として推薦されたが、ヴィクトリア女王がこれを拒否し、貴族院の一員にはなれなかったのである。

ユダヤ人が貴族院議員になるには、1885年までまたなければならない。この年、ライオネルの息子でロンドン市長だったネイサン (Nathan de Rothschild) がヴィクトリア女王により貴族に任じられ、貴族院の最初のユダヤ人議員となったのである<sup>7</sup>。

ユダヤ人政治家としては Benjamin Disraeli (ベンジャミン・ディズレリ, 1804—1881) が有名で、すでに1837年に国会議員となり、二期に亘り首相も務めている (1868年, 1874—1880)。しかし、この人は、生まれはユダヤ人であったが、13歳の時に改宗しイギリス国教会の洗礼をうけている。

実は、このような公職に就くための差別はあったものの、イギリスでは19世紀以降、反ユダヤ的な活動や暴力はなかった。それで、宗教に対し寛大であるという評判がたち、大勢の移民が東ヨーロッパからやってきた。さらに、1930年代～1940年代、ナチの迫害を逃れて多くのユダヤ人がヨーロッパ本土からイギリスに移民したことはよく知られているとおりである。

現在のイギリスのユダヤ人人口は約2,900,000、ヨーロッパでユダヤ人の人口はフランスに次いで2位、世界で5番目となっている。(イスラエル, 米国, フランス, カナダ)<sup>8</sup>

*Loyalties* という作品を理解するにあたって、この作品が発表された1920年当時、すでにユダヤ人は一般市民としての市民権を得ていたということのみならず、貴族にまで取り立てられていた人さえあったということを知っておくことは無駄ではない。さらに重要なのは、この作品がユダヤ人に対する差別を差別として公に扱い、しかもそれを糾弾している最初の戯曲と言ってよいことである。

もちろん、それまでもユダヤ人を登場させている作品はある。例えばユダヤ人を主人公として登場させている戯曲としては古くは Christopher Marlowe (クストファー・マーロー, 1564-93) の *Jew of Malta* (『マルタのユダヤ人』) という作品があるが、この劇が扱うのは、極めてスケールの大きい人物として描かれる主人公の姿である。そして、その人物がユダヤ人なのである。マーローが描くもう一つの作品の主人公、皇帝にまで上り詰めるやはり想像を絶するほどのスケールの大きい人物 Tamburlaine (タンバーレイン) がスキタイ人の羊飼いであるのと同じで、とてつもないことができるバラバスがたまたまユダヤ人であるという話で、ユダヤ人が差別されているという問題意識で書かれた作品であるとは言い難い。

劇中人物であるユダヤ人として最も有名なシャイロックも、シェイクスピアは、当時のユダヤ人を客観的に描いていて、差別される姿も、当時の社会の中のユダヤ人をそれとして描いているだけで、作者もむしろ、その差別を当然のこととして受け入れていると言える<sup>9</sup>。シャイロックは酷い目にあっても当然な人物として描かれているのである。

*Loyalties* が描くのは、上流階級の仲間入りをしかけたユダヤ人と、それを取り巻くイギリス人たちの姿であるが、人種故に上に述べたような階級社会の人々のダブル・スタンダードの犠牲になるユダヤ人とそれに対する作者の嫌悪感がよく表れている。

幕開けの場面がロンドン郊外の Meldon Court (メルドン・コート) にある Charles Winsor (チャールズ・ウィンザー) の別荘であることが、すでにこの作品が上流階級の人々の生活を描いていることを示しているが、登場人物たちもこの別荘の主人チャールズの学生時代からの上流階級の友人たちとその妻たちである。最近知り合いになり、仲間に入った金持ちのユダヤ人、Ferdinand de Levis (フェルディナンド・ド・レヴィス) がただ一人の例外である。

冒頭からユダヤ人であるフェルディナンドに対する差別の感情が描かれる。Winsor 婦人はブリッジで負けて掛け金を払ったときについて、“He did look so exactly as if he'd sold me a carpet when I was paying him.” (「あの人にお金を払ったとき、彼はまさに私に絨毯でも売ったかのような様子だったわ。」) (327) といかにも商人としてのし上がってきたユダヤ人である彼を見下したような言い方をする。しかし、自らそのように差別的な発言をしておきながら、夫、チャールズが “That young Jew does gets (sic) himself disliked.” (「あの若いユダヤ人は嫌われるね」) と言うのに対して “Aren't you rather prejudiced?” (「あなた、ちょっ

と偏見があるんじゃないかしら」(328)と全く自分の偏見に気付いていない。これに対するチャールズの返事は“Not a bit. I like Jews. That’s not against him—rather on the contrary these days. But he pushes himself. The General tells me he’s deathly keen to get into the Jockey Club.”(「全然そんなことはないよ。僕はユダヤ人は好きなんだ。ユダヤ人だっていうことは決して不利なことじゃないんだよ——むしろ当節はその逆だ。だけど、あいつはやり過ぎだな。将軍から聞いたんだけど、あいつ、どうしてもジョッキー・クラブに入りたいんだそうだ。」)(328)である。

このようなやり取りから、観客は当時の上流階級の人々のユダヤ人に対する意識を感じ取ることができる。つまり、大変な金持ちになっているユダヤ人が、最近は力を付けて来て周りにはびこっている。しかしながら金持ちだといっても自分たち上流階級の人々とは全く違う人種なのである。だからクラブに入ってくるなどということに対しては強い反発を抱いている。そしてその財力に対する嫉妬も感じられるのだ。

ユダヤ人のフェルディナンドが、この仲間意識の強い上流階級の人々から敵意を招くのは夕食後、人々が自室に戻ったころ、彼が風呂に入っていたほんの15分ほどの間に、枕の下に入れてあった大金970ポンドが盗まれたと騒ぎ立てることである。そして、こともあろうに、状況から行くと、仲間の一人 Ronald Dancy (ロナルド・ダンシー) が最も疑わしいと申し立てることである。しかし、誰も信じようとはしない。その理由は、ダンシーは、上流階級の一員で、みんなが昔から知っているいい奴だから、そんなことをするはずがないというものである。特に皆の批判がフェルディナンドに集中するのは、このような信頼し合っている人々の中で、しかも個人の家で、大金が盗まれたなどと言いつて立てること自体、不謹慎である、とあたかも金持ちではあっても育ちの悪いユダヤ人の言いそうなことだと言いたいかのようである。上流階級の彼らはフェルディナンドが部屋を出たときに鍵を掛けたということも非常に気に入らない。まるでホテルみたいじゃないかとフェルディナンドを非難するが、ここでチャールズが“decent house”(慎みのある家)(332)という表現を使うのが非常にイギリス的である。上流階級の人々の家なら“decent”な家なのであり、盗みなど起こり得ないし、使用人も皆、昔からいる人たちばかりで、そのようなことをするはずがない。(335) 状況証拠がほとんどダンシーを犯人と疑うに足るようであっても、ダンシーに対して忠実(loyal)である仲間たちは、信じようとしなない。非難がフェルディナンドに集中するのも、彼を下の階級のものとして見下し

てのことである。警察を呼ぶなどと言うことはとんでもないというのが、人々の意見であり、いかにもフェルディナンドがどうしても承知しないのも、上流階級の一員でないからこそだと言いたげである。このように仲間の上流階級の人々には寛大で他者を認めない人々の態度をゴールズワージーは実によく描いている。

最後にフェルディナンドが、ダンシーを犯人として訴え、彼を自殺に追いやる結果になるのも、皆が入っている上流階級のクラブの入会を拒否されるからである。彼はユダヤ人であることを理由に断られたと思い、復讐心に燃え、正義を求めるのである。ゴールズワージーの描くフェルディナンドは、最初に、お金さえ戻ってくれば、騒ぎ立てたり訴えたりはしないと述べていることから、人間としての優しさも持っていることが示されているが、彼が仲間を訴えるという行動に出るのは、結局、ユダヤ人であるがゆえに差別され、それ故に正義を与えられなかったからなのである。

この作品は既に述べたように、人がどこに忠誠心を置くかということ、更にいくつかの忠誠心が互いに相容れない場合もあることを示している。例えば、最後にダンシーが犯人であるという動かぬ証拠が出て来た時、ダンシーやその友人たちに非常に近い立場にある判事が、証拠を握りつぶせる立場になるが、結局ダンシーを告発する。つまり自分に大事なものは、法と正義に関わるものとして法に対して *loyal* であること、つまり忠誠であることだと考えたということである。そして友人としては、せめて、警察が来る前に国外に逃げることを忠告することによって彼に対する忠誠心を示すのである。

この作品には、ゴールズワージーのすでに述べた正義を愛する気持ちと、立場により正しい、あるいは正しくないとする、つまり世間の、そして裁判のダブル・スタンダードに対する嫌悪感が出ている。

立場により評価が変わるということに反対するゴールズワージーの態度は、他の作品にも度々出てくる。例えば、劇としては最初の作品である *The Silver Box* (『銀の箱』)<sup>10</sup> の中では、良家の金持ちの息子が売春婦から財布を盗んだことは不問に付され、この家から銀の小箱を盗んだ浮浪者は罪に落とされる。最後にこの犯人は “Call this justice? What about 'im? 'E got drunk! 'E took the purse—'e took the purse but [in a muffled shout] it's 'is money got 'im off—JUSTICE! (sic)” (「これが正義だということか？ あいつはどうなんだ？ あいつは飲んだくれたんだ！ あいつは財布を盗んだ——あいつは財布を盗んだ。だけど(籠もった声で)金があいつを許したんだ。正義だと！」) (69) と叫ぶが、金持ちと、そうでないものと



は、このように正義の扱いが違うことをゴールズワージーは登場人物の台詞を通じて糾弾している。

*Loyalties* でも、同じ問題が扱われるが、今度は、金持ちであっても、そのようなダブル・スタンダードの犠牲となり得ることを表している。それは、人種差別である。ユダヤ人のフェルディナンドはお金ゆえに上流階級の人々の付き合いの輪に入れてもらえるのだが、ユダヤ人であるために本当の意味では仲間の一員にはしてもらえないばかりか実に不当に扱われるのである。

この作品が発表されたのは1922年であるから、すでに見てきたように、イギリスにおけるユダヤ人の法律上の差別はなくなっていた。それどころかイギリスはヨーロッパの中では、ユダヤ人に対する迫害は少ない方であった。しかし、やはり、社会的には、かなりの差別があったことがこの作品からよくわかる。そして *Loyalties* では、作者は上流階級と社会の中で明らかに不当に扱われるユダヤ人の姿を描き、そのような社会を糾弾する立場をとっている。

現在のイギリスにおいては、ユダヤ人はほとんど差別を経験していないと言ってもよいであろう。(もちろんプライベートな環境の中では、未だ少しはあることあるのだろう)むしろ、彼らは自分たちの立場を広く公に主張するまでになっている。例えば、土曜日のロンドン北方郊外の高級住宅地でユダヤ人が多く住む *Golders Green* (ゴルダーズ・グリーン) 近辺の地域では、真っ黒な装束を付けて、ちじれ毛のもみあげを下げたユダヤ人が大勢歩いている姿を見かける。彼らは自分たちのアイデンティティを主張しながらも、市民権を得ているのである。1990年代の半ばには、特別に聖別された場所でなければ土曜日には車に乗れないユダヤ人で車いすの人々のためにゴルダーズ・グリーンの一部を聖別された地区にし、それがわかるように、その地区の周りに柱を建てたいという要望を一部のユダヤ人が市に対して要求するということさえあった。しかし、この要求も、ユダヤ人自身の中から、まさにそのようなことこそ自分たちが差別される原因になるという意見が出て、中止になった。このことからわかるように、ユダヤ人住民は一般のイギリス人としてイギリス社会に溶け込む努力をし、実際今や溶け込んでいるのである。

このようなユダヤ人の姿は、*Mike Leigh* (マイク・リー) が2005年に発表した、ロンドン郊外に住む現代のユダヤ人家庭を描く *Two Thousand Years* (『2000年』)<sup>11</sup> という作品に良く描かれている。イギリスに住み着いて、既に3世代目のユダヤ人家庭は、ユダヤ人の多く住む地域に暮らしてはいるが、この地域は決して、所謂ゲットウではない。普通の中産階級の普通のイギリス人も多く住んでいる。そして彼ら

は、ごく普通の中産階級のイギリス人と同じ暮らしをし、意見も、普通のイギリス人に近い。例えば、パレスチナ問題についても、決して、イスラエルの肩を持つものではない。

この家には二人の子供がいるが、息子ジョシュは、イギリス人として暮らしているながら、ユダヤ人としてのアイデンティティを何とかして取り戻したいと考えている。それに対して娘、タミーは、ジョシュにユダヤ人であることをどう考えているのかと訊かれて：

being Jewish is just part of who I am...Well, like my little toe...or my middle finger. It's not the whole of me. I feel Jewish and I don't feel Jewish. And I've got no idea what it's like not to be Jewish. (ユダヤ人であることは私が誰かということのほんの一部に過ぎないの。私の足の小指みたいに... さもなければ中指か。私の全体じゃないの。私は自分がユダヤ人だと感じるし、でもユダヤ人じゃないとも感じる。そしてユダヤ人じゃないということがどういうことか全然わからない。) (53)

と答えるのである。<sup>12, 13</sup>

20世紀の初めには社会的な差別を受けていたユダヤ人も21世紀になると、だいぶ様子が変わり、彼らの抱える問題は、差別とはべつのところにあることがわかる。この作品の中ではすでに21世紀に入って、ユダヤ人がユダヤ人であることにこだわること自体を疑問視しているのである。

## II. 20世紀後半の移民たちの問題：ウェスカー作 *The Kitchen*<sup>14</sup>に見る

第二次世界大戦後、イギリスではアイルランド、イタリア、ポーランド、ギリシャ、そして敗戦国のドイツを含む各地からの移民が下層の被差別社会を構成していた。そのような状況を大変よく描いているのがアーノルド・ウェスカーの *The Kitchen* である。1959年の作品であるが、最近もたびたび再演され、日本でも良く知られている作家であり作品である。

ウェスカーは *Look Back in Anger* (『怒りを込めて振り返れ』) の John Osborne (ジョン・オズボーン、1929-94) と同時代に活躍し、舞台上に、それまでは乗せられることのなかった台所そのものに乗せ、そのために“Kitchen Sink Drama”(キ

ツチン・シンク演劇)の作者たちあるいは *Angry Young Men* (怒れる若者たち) と呼ばれるようになった当時の若い作家たちの代表的存在で、彼の作品は常に左翼的で、社会派作品である。父はロシア生まれのユダヤ人、母はハンガリーの系のユダヤ人で共産主義者であった。出世作と言える3部作 *Chicken Soup with Barley* (1958), *Roots* (1959), そして *I'm Talking about Jerusalem* (1960) はある意味、自叙伝的な、ユダヤ人家庭の歴史を描いた作品である。しかし、彼の作品は、ユダヤ人の家庭を描いてはいても、ユダヤ人問題を扱ったものではない。もっと普遍的な問題、労働運動や、フェミニズムなどの社会問題を扱ったものである。

*The Kitchen* も、ユダヤ人問題を扱った作品ではない。ウェスカーの他の作品と比べ短い作品で、当時は、それほど関心を集めなかった。しかし、その後テレビでドラマ化され、映画化もされ、現在では多分ウェスカーの昨作品としては、最も多く再演され、また高く評価されているものだと言える。おそらく、ウェスカーの他の作品と比べても、当時の時代背景をよく写しながらも、現代にも通用する普遍的な問題を扱っているからであろう。

日本でも上演されたが、『調理場』という翻訳が付けられたのは、当時は未だ「キッチン」ではあまりピンとこないのではないかと言うことが理由だったようである。ある意味、この翻訳は今でも正しいと言えるかもしれない。なぜなら、この作品の描く世界は、普通キッチンと言う言葉で私たちがイメージするようなダイニング・キッチンや、リビング・ダイニングの横にあるしゃれたキッチンとは程遠いものだからである。

この作品が描く世界は、大都市の中心部で労働者として過酷な生活をする移民の姿であるが、その象徴として、忙しいレストランの調理場が舞台に乗せられる。台本では、どこの町と特定してはいないが、ロンドン、ないし、イギリスの大きな町のレストランと考えることができる。調理場で働く労働者の他にレストランのオーナーや支配人なども登場し、また、調理場の中でも、シェフや下働きなど一つの身分社会が存在し、一つの小宇宙を構成している。

筋と言える筋はほとんどないこの作品が描くのは、ティヴォリと言う名のレストランの朝7時にオーブンに火が入れられてから、夜中過ぎに消されるまでの間、ブンブンとうなり続けるオーブンの音の中で、大勢の使用人が動き回る姿である。このオーブンの騒音はある意味、この調理場の象徴であり、プロットと呼べるものがほとんどないこの劇のストーリーを一つにまとめていると言えるのかもしれない。

この過酷な環境で働く労働者たちはほとんどが皆、移民だ。ウェスカーは、彼自

身経験したことのある調理場という空間を使って、様々な人種が蠢く下層階級にさえ入れない人々の集団を描いている。

主人公と言える人物は Peter (ペーター) という魚が担当のドイツ人であるが、他に Hans (ハンス, フライ担当) というほとんど英語を話せないドイツ人もいる。その他には、キプロス人の Nicholas (ニコラス, Cold buffet 担当), Mangolis (マンゴリス, 調理場ポーター), そして Gaston (ガストン, グリル専門), ポーランド出身のユダヤ人の Paul (ポール, Pastry 担当) と Bertha (ベルタ, 野菜担当), イタリア人の Raymond (レイモンド, Pastry 担当), アイルランド人の Anne (アン, デザートとコーヒー担当) とやはりアイルランド人の Kevin (ケヴィン, 魚のフライ担当), その他に戦時中捕虜だったイギリス人, 名前からするとイギリス人とも思えない人種不明の人物たち。中国人こそいないが, 種々雑多の仕事を受け持って様々な国出身の人々が混ざり合う, まさに人種のるつぼである。

一日中オヴンが鳴り響く調理場の労働条件は, ほとんどこの世のものとも思えない過酷さである。ケヴィンによれば一日に2000人のお客が来る。特に, 一番忙しい昼食時, 調理場の人々は, 料理の質よりもスピードだけを求められ, ベルトコンベヤーの一部であるかのように, 機械のように, 動き回らなければならない。そして, 経済的効果だけを追い求める調理場のオーナーの Marango (マランゴ) は使用人の大火傷を目の前にしても, 心配すらしめない。少し心配するとすれば, シェフが言うように, “Much he cares. It interrupts the kitchen so he worries” (「あいつは全然気にかけてりしないよ。調理場の邪魔になるから心配する」) (33) だけの話なのだ。この職場の環境は, まさにケヴィンの “This is no place for human being” (「これは人間のいるべき場所ではない」) (47) という言葉どおりの非人間的な空間なのである。

ここで働く人々は, それぞれに金銭問題, 恋愛問題, 不倫問題, 夫婦の問題など, 様々な問題を抱え, フラストレーションの中で生きている。

しかし, 作者が描くのは, 過酷な環境の中でも何か夢を持とうとしている移民たちの姿である。その中で, 特にペーターは誰よりも夢に対する意識が強い。ペーターの夢は, 恋仲にある夫持ちの Monique (モニック) と言うウェイトレスと結婚することである。ペーターに, 離婚してほしい, 自分と一緒にあって欲しいと頼まれても, モニックがなかなか同意しないのも, 彼女にとっては彼との結婚は彼女の夢とは別のところにあるからであろう。モニックはペーターの子供を宿しているが, 生むことを拒否し, 墮胎しようとしている。彼女は既に一度ペーターの子供を墮胎

して、このことから、二人の関係には将来がないことがわかる。

第一部と第二部の間に置かれた”Interlude”（間奏曲）と名付けられた短い場面は、昼食と夕食の間にある、レストラン内のほんのわずかの憩いの時、彼らが人間らしい時間を持てる時であるが、この時、ペーターが仲間たちに彼らの夢が何か尋ねるのも、彼自身夢を持ちたいからであり、彼が即興で台所の用具を使って作り上げるアーチ（門）も、彼の夢への道を象徴していると言える。

ペーターの質問に対し、仲間たちが、金、車、女など、ありきたりな、夢というにはつまらな過ぎるような答えしか出せないのも、この環境がとても夢など持つことのできるような環境ではないからである。確かにポールは友人を持つという夢を持っているが、この台所のような環境では無理なことであり、それが可能になるためには、人が人間的に行動することのできない工場や、調理場がなくなればよいのかもしれないと言う。同じようにペーターも、ある朝この調理場がなくなっていたら、どんなに良いだろうと言うのである。(51-52)

このように、あまり夢という夢を持ってないような彼らではあるが、一つ大きな夢があるとすれば、この国で、この国の人間として生きていくことであるように見受けられる。彼らが様々な国から来て、英語もまだ良く話せなくても、やはりイギリスを自分の国と思っている、ということが様々な形で描かれるのだ。たとえば、キプロス人のニコラスが、ベルタに“Lousy little foreigner”（「汚い小さな外国人」）(23)と毒づかれ、“She calls me foreigner”（「俺のことを外人と言った」）と怒鳴り返す場面も、外国人と呼ばれることに対する強い怒りを表しているばかりでなく、同じ移民であるベルタが他人を侮蔑するときにイギリス人が使う特有の表現で彼を罵ったことに対する彼の何とも言えない切なさ、彼の夢、つまり彼が、何とかイギリス人であろうとしていることを示している。事実、その直前の台詞でも彼ははっきりと“This is my country”（「これは俺の国だ」）(23)と言っているのである。人種のるつぼの中で、イギリス人には見下され、喧嘩し、毒づき合いながらも、移民たちは何とかして、この国の人間として生きてゆこうとしているのだ。

決定的な瞬間は、ペーターが調理場にやって来た乞食にカツレツを二切れ与えたことから始まる。非人間的な空間の中で、ほんの少しの人間性を見せようとしたことで、現場の長であるシェフからも店の主人からも怒られたペーターは、それほど酷く非難されなければならないことに対し、憤り、ほとんど絶望的になるのだ。彼は怒り狂って自ら作ったアーチを壊してしまうが、この行為は彼の夢が終わったことを象徴していると言える。

ウェイトレスのヴァイオレットと些細なことで喧嘩し、彼女の “You bloody German bastard” (「いまいましたドイツ野郎」) という言葉に、激怒しコントロールを失い、“What you call me? What was it? Say it again, Say it again” (「俺のこと、なんて言った? 何だって? もう一度言ってみろ。もう一度言ってみろ」) と怒鳴って (61)、暴れまわり、ガスを切断してしまうのも、フラストが溜まっていた上に絶望的になっていたというだけではなく、一生懸命イギリス人になろうとしている時にドイツ人と罵られたことが大きな原因であると解釈できる。ガスの元栓が閉められ、この劇をまとめるものであり、また、この環境の象徴ともいえるオヴンの音が聞こえなくなる瞬間、その静寂の中に観客はこの世界がペーターにとって終わったことを知る。ペーターは首になるが、彼にとっては夢を持つことすらできないこの環境、そして常に雇人が自分の仕事を妨害しているという被害者意識しか持てない、金のことしか頭にない店の主人マランゴーからも解放されるのである。彼はある日この調理場がなくなることを夢見ていたのであるから、ここを出てイギリス人となる夢を何らかの形で実現しようとするはずである。

この作品は、調理場に限らず労働者がどこでも置かれている過酷な状況を描くために、その典型的な場所として、ウェスカー自身、良く知っている調理場という過酷な環境を選び、作品にしたものなのであるが、当時の労働環境とそこで働く移民の姿を大変良く映し出していると言える。

この作品が書かれた当時は、イギリスにおける移民はアイルランド人が一番多く、その他にはドイツ、イタリア、ポーランドなどからの人々であった。この作品もその状況を良く反映している。

2006年に発表された Tessa Wright (テッサ・ライト) による “The Problems and Experiences of Ethnic Minority and Migrant Workers in Hotels and Restaurants in England” (Working Lives Research Institute, London Metropolitan University (「イギリスのホテルやレストランにおける少数民族と移住労働者の問題と経験」 ロンドン都市大学、勤労者研究所)<sup>15</sup> という論文は、現在でも、ホテル・レストラン業界は、低賃金、低地位、被雇用者への搾取、そして、労働組合もないという非常な悪条件が存在し、その中で働く人々の重要な部分を移民が占めているとしている。さらにまた、同じホテル・レストラン業の中でも、与えられる仕事、たとえばフロントに出るか、裏方をするかなどの処遇も、人種により大きく違っているということを報告している。

この報告書が描く世界は1959年に発表されたウェスカーの作品の環境とそっくり

であるが、大きく違うところは、2006年のテッサ・ライトの報告で登場する移民たちが主として中国、バングラデシュ、フィリピン、スーダンなどの出身の有色人種であるのに対し、ウェスカーの作品の登場人物たちが、ドイツ、ポーランド、アイルランド、ギリシャなど出身の白人であることである。2001年の国勢調査では、労働者の59%が、自分たちのことを白人でないイギリス人と言っていると報告しているのに対し、1950年の国勢調査の結果では、2位にインドが入ってはいるが、その他は1位のアイルランドを筆頭に10位までを白人が占めている。60年代になっても2位にインド、5位にジャマイカが入って来てはいるが残りの1位から10位まではやはり、白人が占めている。テッサ・ライトの報告とウェスカーの作品の違いはまさにこの国勢調査の結果を反映していると言える。

このことは、イギリスにおける人種問題が、今では、1960年代当時の状況とは大きく異なり、様々な人種と言うよりは、白人対有色人種と言う構図になっているということを示していると言えるであろう。実際に2015年2月の国勢調査では労働者の統計は白人、混血、インド人、パキスタン人、バングラデシュ人、中国人、アフリカ／カリブ／黒人、その他という分け方をしている。<sup>16</sup>

この事実を如実に描き出し、有色人種の人々のイギリスにおける苦難を扱っているのが、最後に取り上げる2003年に発表されたクワメ・クウェイ-アルマーの *Elmina's Kitchen* である。

### III. 有色人種の受ける差別：*Elmina's Kitchen* に描かれる被差別社会

題名の *Elmina's Kitchen* とは、カリブ海地域からの移民のエルミナが始めた、主に出前とテイクアウトで商売をしている小さなレストランの名前であり、主人公は、今はそのレストランを継いでいるエルミナの息子デリである。

この作品の作者クワメは2012年に OBE (英帝国勲章) を与えられた俳優、歌手兼劇作家であるが、大変人種意識の強い人で、そのことが彼にこの作品を書かせたと言える。

クワメは1967年3月24日、London でイアン・ロバーツ (Ian Roberts,) として生まれたが、その後、アフリカ出身の黒人としての自身のルーツをたどり、ガーナ出身の先祖にちなみ、19歳の時に Kwame Kwei-Armah と改名した。このことも彼の民族意識の強さを表している。かなり早くからテレビ界で活躍していたが、2005年ウェスト・エンドで彼の作品が上演され、劇作家として本格的に活躍を始める。

ウェスト・エンドで作品が上演された黒人英国人作家としてはクワメが二人目であった。(ウェスト・エンドで作品が上演された最初の黒人は1990年にフリンジの Arts Theatre (アーツ劇場) で *GARY* が上演され、黒人として初めて賞を受賞した作家, Ray Harrison Graham, である)。

クワメにとって *Elmina's Kitchen* は5作目の作品であるが、最初に本格的に注目された作品であると言える。2003年5月, Royal National Theatre(王立国立劇場)で初演され、2004年のローレンス・オリヴィエ賞の最優秀作品賞にノミネートされた。そして同年, *Evening Standard Award* の2003年の最も将来が期待される新人賞を得た。*Elmina's Kitchen* は2005年にはテレビ・ドラマ化され BAFTA (英国アカデミー) 賞を獲得し、劇場版は国立劇場から同年 Garrick Theatre (ギャリック劇場) に移行して公演が続けられた。

クワメの作品も調理場が舞台の中心であるが、ウェスカーの作品がどうかしてイギリス人として認められようとする様々な白人が過酷な労働条件の下で働いている事実を訴えているのに対し、この作品は黒人の移民が何とかまともに暮らしていることもがき苦しむ姿を描いている。

この作品で描かれるのは、カリブ海地域から移民してきた黒人2世、3世の姿で、舞台は劇の名前でもあるレストラン、エルミナのキッチンである。この西インド諸島料理を出し、配達する小さなレストランは Murder Mile (「殺人マイル」と呼ばれるロンドンないしイギリスでも最も治安の悪い地域, Hackney (ハックニー) にある。

この地域については、2001年4月22日発行の *The Observer* (オブザーバー紙) に掲載された記事, 'Two more die on 'murder mile' (『殺人マイル』でさらに二人の死者)<sup>17</sup>の中で

The London borough of Hackney now has the distinction of being the place where you are more likely to hear the sound of gunshots that (sic) anywhere else in Britain. (ロンドンのハックニー市は今ではイギリスのどこよりも銃声が多く聞かれる場所であるという名声を得ている。)

Gunmen have pursued their victims in broad daylight, finishing them off at point blank range in front of streets packed with witnesses. 「殺し屋が昼日中に犠牲者を追跡し、至近距離から、路上で大勢の目撃者の目の前で殺している」

あるい



The area has been synonymous with drug-related crime ever since the term Yardie came into common usage in the late Eighties. (この地域は80年代後半に『ヤーディー (Yardie)』という言葉が普通に使用される言葉になって以来ずっと麻薬関連の犯罪と同意語となっている)

と描写されているが、この作品の中で展開されるのは、まさに、この記事で描かれる通りの世界である

主人公のデリは34歳であるが、既に19歳の息子の父親でもある。過去に投獄されたこともあるが、今では離婚後一人で育ててきた息子 Ashley (アシュリー) には、何とかまともに育って、まともな暮らしをするようになってほしいと願っている。

犯罪と麻薬の蔓延するこの町で、彼が、何とかまともに暮らそうとしていることは、例えば、店に掲げられている張り紙 “No Drugs are permitted on these premises (「店内、薬物禁止」) (3) からもよくわかる。また、まじめに店を営んでいることは、彼の様々な発言にも表れている。例えば店に入り浸る、Digger (ディッカー) との会話の中での、デリの “You can’t run business on lies” (「うその上に仕事は成り立たない」) (6) あるいは “Some things shouldn’t be measured in financial terms” (「経済的な観点から推し量るべきではないものもあるんだ」) (7) などという発言からは、正直に地道に生きようとしているデリの心がけがうかがえる。

地道に生きようとするデリの姿は彼の行動にも表れていて、この町のならず者に言いがかりをつけられても暴力でそれを防ぐようなことはしない。そのために、息子のアシュリーは、他の人々から父親は弱虫だとからかわれているらしい。(10~11) このような主人公の困難な状況は多くの苦境に置かれているマイノリティの人々にありがちな状況と言えるであろう。

しかし、いくら努力しても、この町に住む限り、犯罪と無縁ではいられない。この店の常連客、西インド諸島のグレナダ生まれ (15) のディッカーはニュー・ヨークで5年も刑務所勤めをした後、今はカリブ海域出身者の犯罪組織 (Yardies) の一員であり、この町の顔役でもある。この男が店に出入りしている限りは犯罪組織に狙われないで済み、また組織に上納金を納めないでも済むのでデリがこの男を客として受け入れているという事実もまさにこの町の現状と、デリの置かれている苦しい状況をよくあらわしている。

デリの抱えている困難は既に劇の幕開けから明らかである。店には、常連客のディッカーが居座り、息子のアシュリーはこの町の悪に染まりかかっている。アシュ

リーは金持ちで、偉そうにしているディッガーにあこがれている様子で、彼から仕事をもらおうとさえしている。アシュリーは、今は父親のレストランの配達を手伝っているが、父親のようにつましい生活はしたくないと考えているのである。デリの兄 Dougie (ダギー) はこの日、刑期を終えて家に帰ってくるはずであるが、まともに暮らそうとしているデリに対して、息子アシュリーは暴力を振るわれても歯向かわない弱虫な父親よりも叔父の方が頼りになるだろう、とダギーの出所を楽しみにしている。しかし、ダギーは結局現れない。出所後、帰宅直前に元の仲間から射殺されたという知らせだけが入るのである。警察で正直な証言をしたことで昔の仲間から密告者、裏切者とされたのである。このことから、この町がまさに死と隣り合わせの町であることがよくわかる。

この町でまともに暮らそうとすることの難しさは、デリの向かい側にある、やはり上納金を納めずに頑張っている店がある晩放火されることからわかる。しかも火付けの犯人はデリの息子アシュリーである。ディッガーのために仕事をし、褒美として、前から欲しがっていた高級車、BMW をもらったのである。

このことを知ったデリが警察に通報し、アシュリーがディッガー一味について証言すれば、許してもらえるという取引をしてくるのも、この主人公が、何とかしてまともな市民として暮らし、息子にもそのようになって欲しいと願っていることを表している。そして、それを知った息子が密告者として父親を糾弾するのも、このような環境の中で被差別少数民族として育った思春期の青年の止むを得ない行動と言えるのであろう。そのことはアシュリーがディッガーをかばって言う “He does what he has to do to survive” (「ディッガーは生き延びるためにやらなきゃいけないことをやっているんだ」) (91) という言葉の中によく表れている。けれど、デリが息子に “This is about your survival...” (「これはお前が生き延びられるかどうかの問題なのだ」) と言うように、デリにとっても息子が生き延びることができるようにとった行為なのである。「生き延びる」ためのデリの最後の決断は、店を売って、息子と一緒に故郷のジャマイカに帰るということであるが、これこそ、まさに決して白人と同じように暮らすことが許されない有色人種が人間らしく、まともに暮らすための決断と言えるのかもしれない。

デリの思い切った決断も空しく、息子はディッガーに殺されてしまうが、この事実が描くのは、犯罪の連鎖の町から抜け出ることの難しさとその環境で苦しむ人々の姿である。

デリは故郷に帰る決断をしたとき息子に言う。“But it’s my fault. Should have

got you out of here years ago. But I didn't have the resource..." (「俺の責任だ。何年も前にここからお前を連れ出すべきだったのだ。でも金がなかった…」)  
(90) もっと早くこの町を出なかった理由は金だった、と言うのである。しかし、この町に住む者の中では、彼はまだ恵まれている方であるということがやがてわかる。店で手伝っている Anastashia (アナスタシア) が “You have things others dream of. This place…” (「あなたは他の人たちが夢見るものを持っているじゃないの。この店…」) さらに

You have you child. Anyting better than having you child --How could anyting good happen to you when you don't look after the shit you have.

(「子供がいるじゃない。子供以上に良いものがあるかしら--自分の持っているものをしっかり世話しないでおいて何か良いことが起こるはずがないじゃないの」) (42)

とデリに言うように、彼は店という財産や子供というこの地域で暮らす他の人が夢に見るような大事なものをもっているのだ。最後に、その一番大事なものを失ってしまうまでは、それでも、恵まれている方だったのである。この町に暮らす人々は、もっと貧乏で、もっと大きな問題を抱えているのである。この作品のストーリーは、あたかもこの町に住む者である限りは、決して幸せにはなれない運命にあると言っているかのようである。

確かに、多くの白人移民はやがて移民の住む下町のハックニーのようなところから出てゆき、一般のイギリス人社会に溶け込み混ざってゆくのに、黒人や有色人種のアジア人はいつまでも同じ同胞の住む地域に固まって住んでいる。このことについてクワメのもう一つの作品 *Fix Up*<sup>18</sup>のやはり黒人の主人公 Brother Kiyi (ブラザー・キイ) は親友の Norma (ノーマ) に向かって次のように嘆いて述べている

What's wrong with our people, eh, Norma? The Jewish man come here and buy up the place, then a next immigrant come and buy it off him.

Leapfrogging the West Indians. What was wrong wid we (sic), eh? (「ノーマ、俺たちの同胞はどうなっているんだろう。ユダヤ人はここへやって来て土地を買い、それから次の移民がやって来てユダヤ人からその土地を買い取る。西インド諸島出身者を飛び越えて。俺たちは何がダメなんだろう。」) (13)

先に入ってきた移民は、後から入ってきた移民に場所を譲って前に進んでゆく。それなのに黒人たちだけはとり残されてゆく。何故だ、というのが、クワメの提示する問題である。

既に述べたように、今日ではイギリスでの人種問題は、様々な人種と言うよりは、白人と有色人種の問題になっていると言えるであろう。このことは2011年のイギリスの国勢調査の結果からも裏付けられている。

現在では、イギリスにおける差別、あるいは、マイノリティーの問題についての統計を求めると、出てくるものは、白人とその他の人種という区分けである。以前のように、ユダヤ人、ポーランド人、ドイツ人などとは分けず、白人はひとまとめで、それに対する有色人種という区分けの仕方である。そのような区分けでみると、イギリスにおける有色人種で現在イギリスに一番多いのはインド人、パキスタン人、アフリカの黒人、カリブ海地域の黒人、バングラデシュ、中国、その他の人種、その他のアジア人となっている。

先ほど取り上げた調査でも、過酷な労働条件で働く人々は有色人種が多いことがわかっているが、クワメの作品でも、そのことが大きな問題として取り上げられているのである。

*Fix-up*の主人公はもうからない本屋を経営しているが、家主は、以前はユダヤ人であったが、今ではユダヤ人の後に来たトルコ人が家主である。家賃が払えないブラザー・キイは立ち退きを迫られている。それに対して、彼は“I object to being bullied by a man who’s been in the country for six months”（「この国に来て6か月にしかならない奴に威張らせはしない」）(29)と言うのであるが、移民として入って来てもすぐに立派にやり始める人たちに対して、いつまでも底辺から抜け出せないでいる自分たちの状況に対する苛立ちがにじみ出ている台詞である。

黒人の置かれている状況に対するブラザー・キイの怒りはさらに別の台詞にも表れている。彼が相談に乗っている黒人の少年が退学処分になりそうになるのであるが、その時キイは“**They want to permanently exclude him from school**”（「彼を永久に学校から締め出そうとしているんだ」）(9)この“**exclude**”（締め出す、除外する）という言葉こそ、彼らのおかれている状況を表していると言えるのではないだろうか。

この作品は黒人のアイデンティティーをどう考えるかということが主題であるが、主人公は黒人は黒人としての誇りを持たなければいけないと考えており、黒人が髪の毛をまっすぐにのばしたり、金髪に染めたりしたりすることに反発を覚えている。これは作者のクワメのとする立場と同じで、きちっとした教育を受け、知識を身に着け、自分たちの歴史を知りすべての過去も含めて黒人としてのプライドを持つことで、初めて“**exclude**”されるような立場からぬけ出せるのだと主張しているようで

ある。

『2000年』の中でタミーが“being Jewish is just part of who I am...And I've got no idea what it's like not to be Jewish.”と言うのと同じように、イギリスで有色人種の人々が“being coloured is just part of who I am...Well, like my little toe...or my middle finger. It's not the whole of me. I feel coloured and I don't feel coloured. And I've got no idea what it's like not to be coloured.”と言える日が来たらその日こそイギリスの有色人種の人々も胸を張って生きてゆける日となるのではないだろうか。

## 結論

三つの作品を通じて見ることができるのは、階級社会のイギリスの中で、この社会の階級の中にさえ入らない、イギリス人とは同等に扱われない人々の姿である。ユダヤ人の場合は、早くからその経済力と実力のおかげで、一般市民の仲間入りをし、今では、普通のイギリス人と同じように暮らしている。

白人の移民の場合、母語として英語を話すカナダ人やオーストラリア人等はほとんど問題を抱えていない。第二次世界大戦後ドイツや東欧からイギリスに移住した人々も、第一世代の人々は苦勞をしたようであるが、第二、第三世代ともなると、完全にイギリス社会に溶け込んでいる。イギリスがEUに加盟して以後は特に東欧からポーランド人、チェコ人、ウクライナ人等が移住してきているが、テサ・ライトの報告によれば、これらの人々は白人であるので見た目では差別されることはない。しかし、ひとたび口を開けば、外国人であることがわかり、その結果差別されることとなるという。けれど、彼らが差別されるのは、やはり英語ができない間、あるいは第一世代だけで、その子供たちはイギリスで育ち普通に英語を話せるようになれば、一般のイギリス人たちの仲間入りを果たすのである。

問題は一目で外国人であるとわかる有色人種である。現在では王立シェイクスピア劇団（RSC）などは配役を決める時、肌の色は考慮に入れないとし、黒人俳優が様々なシェイクスピア作品の主役や重要な役を演じている。しかし、これはほんの一握りの恵まれた人々であり、一般のパキスタン、バングラデシ、ジャマイカ等の出身の人々は、何世代もイギリスに住み、イギリスで生まれ、イギリスの国籍を持ちながらも、ある特定の地域に住み、例えばレストランの裏方のような低賃金で過酷な職場で働くことを余儀なくされている人々が多いのである。さらに、2005年7

月7日のロンドン自爆テロの4人の犯人が一人はジャマイカ生まれで一歳の時に移住してきたが、それ以外は皆、両親はパキスタン出身だがイギリス国籍を持ち、イギリス生まれで大学教育も受けている青年たちであったこと<sup>19</sup>は重要な問題であろう。

三つの作品を取り上げ、イギリスにおける人種問題について考察してみたが、実のところ、イギリスの演劇の中で人種問題を取り上げている作品は多くはない。それどころか、いわゆるマイノリティーと呼ばれる人たちが登場する作品もあまりない。テレビの番組でさえ、BBC News は、ドラマや番組に登場する有色人種の人々の割合は、実際の社会の割合よりはるかに少ないと報告している。<sup>20</sup> 事実 Shaun Bailey (ショーン・ベイリー) とのインタビューの記事は、このアフリカ・カリブ系の保守党議員で首相 David Cameron (デイヴィッド・キャメロン) のアドヴァイザー<sup>21</sup>が “Party is also struggling with Blacks because it refuses to talk about racism head on” (「党は正面から人種問題について話すことを拒否しているから(黒人の票を集めるのに) 苦労している)」と述べたと伝えた後、彼は “We need to talk about race,” (「人種について話す必要がある)」と述べ、“Our weakness is we don’t talk about it” (「我々の弱みはそのことについて話さないことだ)」と述べたと伝えている。<sup>22</sup>

本論で取り上げた三つの作品も、クワメの作品以外は、実は人種問題が本当の主題ではない。ゴールズワージーの *Loyalties* は、イギリスの上流階級の人々の偽善を描き、ユダヤ人はその被害者として登場している。ウェスカーの *The Kitchen* の場合も、ウェスカーが訴えたかったのは労働者の置かれる過酷な状況であり、その状況が凝縮された職場である調理場を舞台にしたというのが事実である。しかし、両方の作品ともに、人種問題を特に強調していなくても、その実情を自然に描くことによってかえって現実をよく表し、強く訴える結果となっている。これこそが演劇の持つ強い力なのである。

イギリス政府の国勢調査の結果の報告によればイングランドとウェールズにおける住民のうち白人の割合は1991年には94.1%であったのに対し2001年には91.3%、2011年には86%と漸減しており<sup>23</sup>、ロンドンの白人英国人の割合は今や44.9%であると報告されている。<sup>24</sup> このようにイギリスは今や多民族社会になってきていると言わざるを得ない。もちろん、冒頭にも述べたように、イギリスの人種問題は決して単純なものではない。国勢調査の結果を見てみると実に様々な要素があり、世界情勢の動きに従って、様々な国の様々な人々が多種多様な理由で流入してきている。

イギリスの首相キャメロンは、ヨーロッパに流入するアフリカや中近東からの難民を EU が加盟国に対して受け入れの割り当て数を決めて各国で引き受けるようにと出した提案を断固拒否する構えである。そして既に EU からの移住受け入れも削減する計画を立てている。<sup>25</sup>

ケイト・フォックスは“Englishness”（イギリス人らしさ）を定義するにあたって、イギリスに住む様々な人種の人々の影響は重大であるとし、“Englishness”と言えどもイギリスに住む、アジア人<sup>26</sup>、アフリカ人、カリブ人等の影響を受けざるを得ず、彼らが自分たちをイギリス人であると考えていなくても、彼らは“Englishness”が形作られるうえで大きな貢献をしていると述べている。また、移民の人と言えども、文化適応をし、人によっては、イギリス人よりもイギリス的になっている人もいるとも言っている。<sup>27</sup> このことから言えることは、もともとイギリスに住んでいるイギリス人たちが、移住してきた人々の文化を容認し、理解し、また移民の人々もイギリスの文化に適応し、互いに対して寛容になることが今や多民族国家となったイギリスの人々にますます求められているということであろう。

---

<sup>1</sup> Kate Fox, *Watching the English* (Hodder & Stoughton, London, 2004), 15.

<sup>2</sup> John Galsworthy, “Loyalties” in *Galsworthy Five Plays*, Methuen. Drama, London, 1984. 本論における引用はすべてこの版からで、各引用の終わりに（ ）内にページ数であらわす。

<sup>3</sup> Robert Chambers, *History of the Jews in England*, Nabu Public Domain Reprints, 436270LV12B/337/P, 1-2.

<sup>4</sup> Ibid.

<sup>5</sup> Ibid. p.s.

<sup>6</sup> 英国ユダヤ人の歴史、<http://inri.client.jp/hexagon/floorA6F-he/ai> 2015/04/27.

<sup>7</sup> Alan and Veronica Palmer, *The Chronology of British History*. Century, London, Sydney, Auckland, Johannesburg, 1992. Par. sem.

<sup>8</sup> Jewish Virtual Library, <http://www.jewishvirtuallibrary.org/jsource>, 2015/04/27.

<sup>9</sup> Ibid.

<sup>10</sup> Galsworthy, *The Silver Box*, Zhingoora Books, Lightening Source Uk Ltd., Milton Keynes, UK.

<sup>11</sup> Mike Leigh, *Two Thousand Years*, Faber and Faber, London, 2006.

<sup>12</sup> 西村俊一、正慶孝編著『日本人教育の条件：グローバル化と人間形成』、2007、

---

原書房 (247-282)。

<sup>13</sup> このこと及び後述の Kwame の作品については『日本人教育の条件：グローバル化と人間形成』（西村俊一，正慶孝編著，2007，原書房）に掲載された拙文「イギリス人のアイデンティティー」の中に詳しく書いている。一部重複する部分もあるが，前論ではイギリス人のアイデンティティーの問題として扱っており，本文の人種問題とは別の視点から書かれている。

<sup>14</sup> Arnold Wesker, “*The Kitchen*”, in *The Kitchen and Other Plays*, Penguin Books. 1990.

<sup>15</sup> Tessa Wright, “The problems and experiences of ethnic minority and migrant workers in hotels and restaurants in England, Paper for CRWS Workshop Serving the New Economy: Critical Perspectives on Hospitality and Tourism Work, 13-14 October 2006, Toronto Canada. Working Lives Research Institute, London Metropolitan University, London [www.workinglives.org](http://www.workinglives.org).

<sup>16</sup> Office for National Statistics, ‘Labour market status by ethnic group.’  
<http://www.ons.gov.uk/ons/se>

<sup>17</sup> Tony Tompson, “Two more die on ‘murder mile’”, *The Guardian|Observer*,  
<http://www.theguardian.com/uk/2001/apr/22/tonythompson.theobserver1/>.  
.. 2014/03/15

<sup>18</sup> Kwame Kwei-Aramah, *Fix Up*, Methuen Drama, London, 2004. すべての引用はこの版からページ数で示す。

<sup>19</sup> House of Commons. “Report of the Official Account of the Bombings in London on 7th July 2005”. The Stationary Office, London, May 2006, 36.  
<https://www.gov.uk/government> 2015/05/12.

<sup>20</sup> BBC News | TV and Radio, <http://news.bbc.co.uk/2/hi/ei>; “TV ‘ignores’ ethnic minorities”.

<sup>21</sup> *The Telegraph* の2013年5月10日の記事は，ベイリーは首相の取り巻きにより首になったと伝えている。

<sup>22</sup> “Racism in England: PM Advisor Says Britain is Still Racist”.  
<http://newsone.com/2689612/shaun-bailey-racism-in-england/2014/02/12>.

<sup>23</sup> Office for National Statistics, ‘Ethnicity and National Identity in England and Wales’, <http://www.ons.gov.uk/ons>. 2015/05/12

<sup>24</sup> Mail Online, Tuesday, May 12, 2015, “‘British Whites’ are the minority in London for the first time as census shows number of immigrants has jumped by 3 million”, <http://www.dailymail.co.uk/> 2015/05/13.

<sup>25</sup> BBC News|Cameron bares teeth over EU migration,  
<http://www.bbc.com/news/> 11May, 2015.

<sup>26</sup> イギリスにおいてアジア人と言うときは、南アジア、つまり主にインド、パキスタン、バングラデシの人々を指す。

<sup>27</sup> Kate Fox, *op. cit.* 16~18.

## 参考文献



- 
1. BBC News | TV and Radio. “TV ‘ignores’ ethnic minorities”.  
<http://news.bbc.co.uk/2/hi/ei> ; .
  2. Ibid. “Cameron bares teeth over EU migration”.  
<http://www.bbc.com/news/> 11May, 2015.
  3. Chambers, Robert. *History of the Jews in England*. Nabu Public Domain Reprints, 436270LV12B/337/P.
  4. Fox, Kate. *Watching the English*. Hodder & Stoughton, London, 2004.
  5. Galsworthy, John. “Loyalties” in *Galsworthy Five Plays*. Methuen Drama, London, 1984.
  6. House of Commons. “Report of the Official Account of the Bombings in London on 7<sup>th</sup> July 2005”. The Stationary Office, London, May 2006, 36.
  7. Jewish Virtual Library. <http://www.jewishviruallibrary.org/jsource>. 2015/04/27
  8. Kwei-Aramah, Kwame. *Elmina’s Kitchen*. Methuen Drama. London, 2003.
  9. Ibid. *Fix Up*. Methuen Drama, London, 2004.
  10. Mail Online, Tuesday, May 12, 1915, “British Whites’are the minority in London for the first time as census shows number of immigrants has jumped by 3 million”. <http://www.dailymail.co.uk/> . 2015/05/13.
  11. Leigh, Mike. *Two Thousand Years*. Faber and Faber, London, 2006.
  12. Marmick, Arthur, ed. *The Illustrated Dictionary of British History*, Marmick, Thames, and Hudson, 1980.
  13. Office for National Statistics. ‘Labour market status by ethnic group’. <http://www.ons.gov.uk/ons/se>. 2015/05/11.
  14. Palmer, Alan and Veronica. *The Chronology of British History*. Century, London, Sydney, Auckland, Johannesburg, 1992.
  15. Tompson, Tony, “Two more die on ‘murder mile’”. *The Guardian*|Observer,
  16. Ibid. ‘Ethnicity and National Identity in England and Wales’.  
<http://www.ons.gov.uk/ons>. 2015/05/12.
  17. Wesker, Arnold. “*The Kitchen*”, in *The Kitchen and Other Plays*, Penguin Books, 1990.
  18. Wright, Tessa. “The problems and experiences of ethnic minority and migrant workers in hotels and restaurants in England”, Paper for CRWS Workshop Serving the New Economy: Critical Perspectives on Hospitality and Tourism Work, 13-14 October 2006, Toronto Canada. Working Lives Research Institute, London Metropolitan University, London, [www.workinglives.org](http://www.workinglives.org).
  19. 「英国ユダヤ人の歴史」 <http://inri.client.jp/hexagon/floorA6F-he/ai> 2015/04/27.
  20. 西村俊一, 正慶孝編著 『日本人教育の条件: グローバル化と人間形成』2007, 原書房。